ヨーロッパ発〜日本経由〜中国行き
——「西学東漸」のもう一つのみちすじ——

内田慶市

はじめに

近代中国、とりわけアヘン戦争後の開国以来の急速な「西学東漸」の具体的な現象として、近代ヨーロッパの科学技術関係の書物の「翻訳・出版」事業を挙げることが出来る。

この「翻訳・出版」事業の主要な担い手は、先ずほかでもなくヨーロッパの宣教師、ついで洋務派や変法派の「覚醒」した中国人であるが、実は、日本人も直接、間接を問わず、一定程度の役割を担っていたと考えられる。つまり、「ヨーロッパ発—日本経由—中国行き」という、「西学東漸」のもう一つの「みちすじ」があったように思われるのである。

本稿では、特に「近代中国における日本書籍の翻訳」という点から、そのことを考えてみることにしたい。

近代中国の訳書機構

近代中国の翻訳・出版事業は、基督教の伝来と共に起こったと言っても過言ではないほど、宣教師と深くかかわっている。彼等は布教のためとは言え、私を捨てるほどの情熱で言語、習慣の壁を乗り越えて、西洋の文化を中国に伝えようとし、また中国の伝統を西洋に伝えようと努力したのである。

宣教師を中心とした、このような近代中国における翻訳・出版事業は大きく２つの時期に分けることが出来る。

(1) マテオリッチ（利瑪竇）の来華（1582）から康熙禁教、イエスズ会解散（1773）まで

この200年間に中国で訳された「西書」は約437種である。(熊1994)

(2) モリソン（馬禮遜）来華（1782）から辛亥革命（1911）まで

この期間はプロテスタント宣教師の時代であり、さらにアヘン戦争前後で分けることも出来る。

今回は２つ目の時期のうち特にアヘン戦争以降が関係してくることになる。

1．十大訳書機構

アヘン戦争以降に中国で作られた翻訳・出版機構に代表的なものは次のものである。いわゆる、「十大訳書機構」(熊1989) と言われるもので、それはしかも上海に集中している。

(1) 墨海書館（1843あるいは1848）

London Missionary Press

ロンドン伝道教会のメドハースト（W. H. Medhurst）による。元はバタビアに。

Wylie、J. Edkins、Muirhead、Hobson、李善蘭、王韜など。

1860年、美華書館の上海移転に伴い業務を停止。

(2) 美華書館（1860）

The American Presbyterian Mission Press

アメリカ長老会。

前身は花華聖経書房。1884年マカオ、1845年寧波に、1860年に上海へ移転し、改称。William Gamble による。

Muirhead の『地理全志』、『萬國公報』など出版。

(3) 京師同文館（1862）

晩清の最初の官立外国語学校。1858年の天津条約（今後は英国との公文

書は英文を用い、英文を正文とする)、および1960年の英仏による北京入城に伴う、通訳人材の育成などを目的とする。徐継畬が同文館事務大臣を担当。

はじめは英文館、1866年にフランス、ロシア語館、及び天文算学館が、1888年にはドイツ語館、日清戦争後に東文館が設けられた。傅蘭雅や丁韙良などの宣教師が教習にあたる。

(4) 江南製造局翻譯館 (1868)

(5) 格致彙編社 (1876)

傅蘭雅 (John Fryer) による。『格致彙編』出版。

(6) 益智書會 (1877)

The School and Textbook Series Committee

光緒3年 (1877)、在華基督教団の共同事業として設立。韋廉臣が主幹、傅蘭雅が編集主任。

1877年の廣學会の設立で消滅し、1890年に「中國教育會」に改組。

(7) 廣州博済醫院 (1858)

嘉約翰 (John Glasgow Kerr) による。

同光間で西医関係の書籍を最も多く出版したところ。

(8) 天津水師学堂

(9) 廣學會 (1887)

The Society for the Diffusion of Christian and General Knowlege among the Chinese

スコットランド長老会の韋廉臣 (Alexander Williamson) によって、光緒13年 (1887) 設立。始め「堂文書會」のち1894年に「廣学會」と改称。慕維廉 (William Muirhead)、花之安 (Ernst Faber) などがいた。韋廉臣の死後は李堤摩太 (Timothy Richard) が主宰。林樂知 (Y. J. Allen) の『萬國公報』を会の機関誌として復活。ほかに、Matter、J. Edkins などもいた。『文學興國策』(森有礼) の翻訳もここで行なわれる。

(10) 譯書公會（1897）

董康、趙元益など。

〈以上、鄒1989、張1990、葉1990などによる〉

また1898年以前に、上海で出版された「西書」は434種に上っている。（張1990）

以上、見てわかるように、近代中国の訳書機構はほとんどが教会関係のものであるが、「江南製造局翻譯館」はその中でも特異な存在であると言うことができる。

江南製造局翻譯館

江南製造局は李鴻章や曾國藩などの奏請で、同治四年（1865）に上海に置かれた官立の兵器廠（軍事工場）である。

製造局は始め虹口に置かれたが、その後1867年に城南の「高昌廟」に移され、その時に同時に徐壽などによって「翻譯館」の併設が建議されて、1986年6月に開設された。その後、1969年10月には「上海廣方言館」（1863年に「上海學習外國語言文字同文館」という名称で作られ、1867年に「上海廣方言館」に改称された一種の外国語学校）が「翻譯館」に移ることになる。

この「翻譯館」は先にも述べたように、近代中国における訳書機構のうちで最大で、しかも中国人の手になるものということで特筆すべきものである。ただ、中国人の手になるものとは言え、その中心的役割を果しのはやはり宣教師、傅蘭雅（John Fryer）であり、結果としては、中西の「協同」の事業であったとみるべきであろう。

訳員には、徐壽、華蘅芳、李善蘭、偉烈亞力、瑪高溫、傅蘭雅、金楷理、林樂知、藤田豊八など、総勢59名（熊1994）知られている。

2－1．翻訳の方法

「翻譯館」での翻訳事業が、それまでの各種の訳書機構と異なる点は、中国人の手になるものという以外に、いかなる書籍を翻訳するか、またどのような方法で翻訳するかといった「翻訳の原則」を確立しようとしたことであろう。

傅蘭雅の「江南製造總局繙譯西書事略」(1880) には「翻訳館」の成立からその翻訳の原則等が詳しく述べられている。

まず、何を翻訳するかについては、次のように述べている。

> 初譯書時、本欲作大類編書、而英國所已有者雖印八次、然内有數卷太略、且近古所有新理新法多未列入、故必察更大更新者始可繙譯。後經中國大憲論下、欲館内特譯緊用之書、故作類編之意漸廢、而所譯者多零件新書、不以西國門類分列。平常選書法、爲西人與華士擇其合己所緊用者、不論其書與他書配否、故有數書如植物學、動物學、名人傳等尚未譯出。另有他書雖不甚關格致、然於水陸兵勇武備等事有關、故較他書先爲講求。

つまり、当初、傅蘭雅のつもりでは、大英百科事典のような大部なものから、系統的に、またより新しいものから翻訳しようと考えていたようであるが、当時の要請はいわゆる「緊急な事」つまり、軍事関係の書物であったわけである。従って、他の書物との関連とかは考慮されず、いわゆる「格致」とは無関係なものまで「緊急」ということからのみ翻訳せざるを得なかったわけであり、この点は傅蘭雅たちにとっては不満だったかも知れない。

次に翻訳の方法、特に「訳語」の問題には十全の注意を払ったことがうかがえる。専門養護の確立について次のように３つの原則を述べている。

(1) 中国語がすでに存在する場合

a．科学、工芸についての中国、並びにイエスズ会や最近の宣教師の著作

を調査する。

b．知っていそうな中国の商人や製造業者などに問い合わせる。

(2) 新しい用語を作る

a．常用字に偏旁を加えて作る。音は元のまま。たとえば「鎂（Mg）」「鉀（As）」「砰（Ce）」「矽（Si）」。或いは、非常用字に新しい意味を与え新語とする。たとえば、「鉑（Pt）」「鉀（K）」「鈷（Co）」「鋅（Zn）」。

b．できるだけ字数を少なく熟語を作る。たとえば、「養氣（氫＝O）」「輕氣（氫＝H）」「火輪船（汽船）」「風雨表（気圧計）」。

c．漢字で西洋の名称を当てる場合、「官音」[注1]を主とし、同じ発音のものは出来るだけ同じ漢字を当て、また以前の翻訳者が用いたものを踏襲するようにする。

(3) 「中西名目字彙」（つまり、対訳集）を作る。たとえば『金石中西名目表』（1883）『化學材料中西名目表』（1885）『西藥大成藥品中西名目表』（1887）『汽機中西名目表』（1889）などがそれである。

このような、あくまでも「中国」および「中国語」を常に念頭に置いた「翻訳の原則」の下で、質の高いものが出版されていったわけである。この「質の高さ」（廣州博済醫院や同文館の訳などと比較して）に関して、梁啓超の『讀西學書法』（1896）に次のような記載が見られる[注2]。

化學鑒原與續編、補編合爲一書、化學考質、化學求數合爲一書、譯出之化學書最有條理者也。廣州所譯化學初階、同文館所譯化學闢原、開卽化學鑒原云、西文本同一書、而譯出之文、懸絶若此、誠可異也。……初階譯筆甚劣、幾難索解、可不讀。闢原所定之名……皆杜撰可笑。（3表）

2－2．訳書数

江南製造局の訳書数は1880年までのものは「西書事略」によれば、既刊98種、

235冊、翻訳済みで未刊のもの45種、124冊。また、販売数は32111部、83454冊となっている。

なお、「江南製造局翻訳館」の廃館がいつであったのかははっきりしていない。1909年には『江南製造局譯書提要』が出されていることから、1909年までは存在したことは明らかである。橋本（1990）では1912年としている。

また廃館までの総発行数についても、鄒1886の199種を最高に、『江南製造局譯書提要』では160種（付刻10を含む）、『上海研究資料』（1936）では180種余り『上海縣續志』（1918）では185種、『上海通志館期刊』（1933）では186種と諸説がある。

梁啓超の『西學書目表』（1896）には630種収められているが、そのうち1896年以前に出版された352種の「西書」のうち、江南製造局の翻訳したものは120種にのぼる。（鄒1986）

藤田豊八

ところで、「翻譯館」には一人の日本人が登場する。藤田豊八である。熊1989、1994では次のようにある。

> 藤田豊八は日本の学者で、戊戌維新の頃、上海農学会において多くの農学関係の書籍を翻訳した。1898年江南製造局が工芸学堂を設立したとき、同学堂の翻訳員として招請され、専ら工芸関係の書籍の翻訳を行なった。一説によれば、藤田豊八を招いた大きな理由の一つは「給料がヨーロッパ人より随分安い」ということであったらしい。彼が製造局で訳したものは『造洋漆書』と『顔料篇』の２冊だけである。

江南製造局付属の学校である「工藝學堂」の「章程」（1898）には次のように

ある。

学生定員50、4年
化学工芸、国文、英文、数学、機械工芸、絵画（つまり設計）
日本大坂工業学校の規程を模範とする。
書籍が必要であるが、先ず必要なものを翻訳しなければならず、そこで日本人藤田豊八を招いた。「給料が西洋人より極めて安くすむ」からである。
（『中國近代學制史料第1輯』1983）

この「給料が安い」という点については、たとえば吉野作造1909の以下のような記述も見られるから、確かであったようである。

加之、日本人を招聘するは、欧州人を招くよりも、少額の俸給と少額の旅費にて足るの利益あり。日本人教師の旅費とし受くる所、片道平均二・三百元にして、少なきは百五十元位、最も多きものと雖も四五百元を出でず。又俸給の点を見るも、前段既に述べし如く、平均一ケ月二百二十元なるが、欧米人は生活の程度高きを以て，中等以上の紳士ならば、最も低きに甘んずるものと雖も、六七百元以下にては招聘に応ぜざるべし。故に、将来に於ける清国の教育界は、若し外國人の力を藉らざるべからずとせば、必ずや日本人に依頼するの外なるべきの道理なり。
（「清國在勤の日本人教師」『國家學會雑誌』第23巻第25号）

藤田豊八については、中国の教育史上に果した役割、或いは王国維、羅振玉との関係などから、これまで研究がなされてきているが、たとえば、『教育世界』第70号（1904）には次のようにある。

藤田博士上海の聘により中国に渡来し、東文学社の設立を提唱す。この頃、

わが国の人々はまだそれほど和文社（日本語学校）には注意を払っていなかった。その後、廣方言館、南洋公学付属東文学社教習を歴任す。……

（須川1983　東方学66）

この「廣方言館」というのが恐らく「江南製造局翻譯館」のことと思われる。

以下に参考までに藤田の在華時代を中心とした簡単な年譜を示す。

〈藤田豊八略伝〉

明治二年（1869）　九月十五日　徳島県美馬町郡里（コウサト）村生まれ

明治十九年　　徳島中学卒

明治二十年　　第3高等中学校予科入学

明治二十五年　同本科卒

明治二十五年　東京帝国大学文科大学漢文学科入学

明治二十八年　大学院入学（支那哲学史専攻）同期の卒業生に狩野直喜。田岡嶺雲、笹川臨風などと「東亞説林」を発行。

明治三十年（1897）　春、清国に渡る。馬建忠等と新聞を経営。羅振玉の『農學報』の訳者に招かれる（藤田着任前は古城貞吉）。

明治三十一年（1898）　羅振玉、上海に「東文學社」を創立、田岡嶺雲と共にそこの教習となる。（この時の学生が王国維）

明治三十三年（1900）　事変のため帰国

明治三十四年（1901）　羅振玉の招きで再び清国へ。南洋公学付属東文学堂の教授。『教育世界』編集顧問。

明治三十五年（1902）　羅振玉、両廣総督に聘せられたのに伴い、教育顧問として広東に。

明治三十八年（1905）　羅振玉が江蘇尋常高等師範学堂を創立にあたり、総教習に。（中国での師範教育のはじめ—これにより清国より三等双龍宝章を贈られる）

明治四十二年（1909）　羅振玉、北京農科大学長に伴い、総教習に。
明治四十四年　帰国（ペスト流行のため）。
明治四十五年　再度渡清。辛亥革命で羅氏を伴い帰国。
大正七年（1918）　広東へ。

（『東方学』63）

この略伝を見ても「江南製造局翻譯館」については触れられてはいない。

藤田が1898年に製造局の翻訳に携わったことは、熊1989、1994の記述でわかるが、いつまでかについてはよくわからない。橋本1990は1909年までとしているが、略伝からすれば1902年には広東へ、1925年には蘇州に行っており問題は残る。

なお、『農學報』については、王福康、徐小蛮1987に次のようにある。

1897年４月（清光緒二十三年三月）に上海で創刊した、中国最初の農学雑誌。はじめ半月刊、２年目より旬刊。1906年１月停刊まで計315期。毎期約30頁、１期３万字あまり。

内容は以下のようなものである。

1. 農政…主に役人の皇帝への奏上書のうち農政政策に関する概要
2. 各省の農事…各地の農業生産情況の紹介
3. 報刊選訳…ヨーロッパ、日本の学界誌の農業生産技術に関するもの
4. 農業理論…近代農業の理論、知識の紹介
5. 農会博議…中国農学会の活動情況の紹介

訳者のほとんどが羅振玉の創設した「東文學社」の学生や教師であり、その中でも、日本人教師藤田豊八は多くの農学著作の翻訳を行った。

藤田豊八の『農學報』（1897．７～1901．12）での訳書については、須川1983では次のようなものが挙げられている。

蚕桑実験説
樟樹論
蜜蜂飼養法
制蔗栗糖法
農産物分析表
泰西農具及獣医治療器械図説
麻栽制法
美国種蔗栗栽制試験表
中国度量衡表
顔料篇

ただ、後述のように、藤田の訳したものはこれだけには止まってはいないようである。

3－1．日本教習

藤田豊八などはいわゆる「日本人教習」つまり「清国お雇い日本人」の先駆とも見ることができる。日本語重視の状況の中で、東文学社の設立、東語学習が盛んになっていくわけであるが、この問題についてはここでは触れないこととする。

東文への傾斜

日清戦争以降、単なる洋務から変法へという動きに伴って、「東文」すなわち日本語への傾斜が強まってくる。たとえば、以下の通りである。

a．譯書公會章程（1897）

本公會之設、以採譯泰西東切用書籍爲宗旨。・・・至日本爲同文之國、所譯西籍最多、以和文化中文取徑較易、本會尤爲此兢兢焉。

江浙商務出口之貨、以絲繭爲大宗、近年華商所耗、苦累已極、日本蠶務蒸

蒸日上、由其加意考核廣譯西書也。今本會廣譯東方蠶桑各書、并刊簡明善本、繪圖列説遍饗村農、或亦中國收回権利之一助云爾。

b．康有為「請廣譯日本書派游學摺」(1898．5)

奏爲請廣譯日本書、大派游學、以通世界之識、養有用之才、恭摺仰祈聖鑒事。

日本昔亦閉關也、而早變法、早派游學、以學諸歐之政治工藝文學知識、早譯其書、而善其治、是以有今日之強而勝我也。吾今自救之圖、豈有異術哉。亦亟變法亟派游學、以學欧美之政治工藝文學知識、大譯其書以善其治、則以吾國之大、人民之多、其易致治強可倍速過于日本也。

臣愚顓顓思之、以爲日本與我同文也、其變法至今三十年、凡歐美政治文學武備新識之佳書、咸譯矣、但工藝少闕、不如歐美耳。譯日本之書、爲我文字者十之八、其成事至少、其費日無多也・・・

c．張之洞『勸學篇』

遊学の国についていえば、西洋より東洋（日本）がよい。一つには距離が近くて経費が少なくてすみ、たくさん派遣できること。また東文（日本語）は中文に近く、通暁しやすいこと。また西書は甚だ繁雑であるが、西学で切要でないものに対して日本人はそれらを刪節して、よく酌改していることなどからである。また、中東（中国と日本）は風俗習慣が似通っており、半分の努力で功は倍となり、これにまさるものはない。〈遊学篇〉[注3]

d．梁啓超「論譯書」では「変法通義」の〈論訳著〉の中で日本と中国が「同文」の国であるとしたうえで、日本語の学びやすい点を５つ上げている。

1. 発音数が少ないこと。
2. 発音はすべて中国語にあるものであり、しかも難しい音がないこと。
3. 文法が大ざっぱであること。
4. 名物や形容が中国と多くは同じであること。
5. 漢字が半分以上を占めていること。[注4]

梁啓超は「論譯書」以外にも、いろんな所で日本語の重要性について述べている。「東籍月旦敍論」(1902) などもその一つであるが、そこでは要約すれば次のようなことが述べられている。

> 外国語、特に英語を学ぶ者は多いが、厳復を除いてはだれ一人として、その学術思想までを中国に輸入した者はいない。西学を学ぶものは、東学(日本の学問) を学んだものには遠く及ばない状況である。それには、いろいろな理由、たとえば、西学を幼い時より始めて、中国の学問を全く知らないのに対し、東学を治めるものは、成人から始める場合が多く、すでに自分自身で考える力、見分ける力が備っており、勢い得るところも多くなることなどが上げられている。従って、先ず東籍を学ぶべきで、その為には日本語に通じなければならない。

なお、言葉の習得、外国語の習得という現代の観点から見ても、基本的にいわゆる「実用」と「教養 (知識)」を分けて捉える考え方に対する批判でもあり、言語、外国語の習得というのは、背景にある文化、思想等を併せて習得することであるべきであるとする考え方は共鳴できるものである。

『東西學書録』

以上のような「日本」ならびに「日本語」重視の傾向の一つの具体的な現われとして、『東西學書録』を見ることができる。

『東西學書録』(1899) は徐維則によって編集され、その後、徐維則、顧燮光『増版東西學書録』(1902) によって1899年から1902年の補充がなされているが、この中には、かなりの日本書の翻訳が含まれている。

実藤恵秀監修・譚汝謙編『中国訳日本書籍総合目録』(1980) によれば、1894～1911における日本書籍の翻訳は512冊を数え、特に1900年以降、ことに1905年以降に急増するとあるが、実際にはすでにこの『東西學書録』あたりから大

量の流入の兆しが見えているのである。

今、『増版東西學書録』の巻一から巻四まで（巻五から巻六は、いわゆる旧譯本類であるので、今回の統計からは除いてある）の収録数をまとめて見ると以下のようになる。

	総数	日本書
（巻１）		
史志	96 (64)	34 (25)
政治法律	34 (21)	9 (8)
學校	28 (19)	13 (12)
交渉	23 (12)	7 (6)
兵制	70 (24)	15 (14)
（巻２）		
農政	92 (45)	58 (35)
工藝	82 (17)	2 (5)
礦務	15 (5)	0 (0)
商務	41 (27)	9 (6)
船政	10 (2)	0 (0)
（巻３）		
格致	21 (4)	2 (1)
算學	42 (7)	7 (5)
重學	9 (0)	0 (0)
電學	9 (2)	0 (0)
化学	24 (6)	2 (2)
聲學	7 (1)	0 (0)
光學	10 (1)	0 (0)
氣學	17 (3)	0 (0)

天學	13（1）	0（0）
地學	53（17）	7（4）
全體學	18（4）	0（0）
動植物學	19（2）	2（1）
（巻4）		
醫學	52（6）	3（1）
圖學	12（1）	1（1）
理學	11（3）	1（1）
幼學	14（8）	3（3）
宗教	6（1）	0（0）
遊記	19（10）	4（3）
報章	33（10）	2（1）
議論	27（16）	8（6）
雑著	16（10）	3（2）
合計	885（349）	196（141）

*（ ）内は増版で補充された数である。

この数字を見ると、1899年から1902年までの間に、日本書籍の翻訳が141種なされたことがわかるが、特に、歴史、政治、教育、外交、それに圧倒的に多いのが農業関係であることが注目される。

また、日本人翻訳者としては藤田豊八（15種）以外に、古城貞吉、松林孝純、田岡佐代治、中江篤介、角谷大三郎ほか二十名余りの名が挙げられているが、これらの人物については今後の調査を待ちたいと思う。ただ、これらの人物は、これまで、いわゆる「日本人教習」として名前が挙げられている人々（たとえば汪向栄1991）とは別の系統のように思われる。

近代中国語との関わり

実は、ここまで述べてきたことは、「近代中国語」研究のための準備作業の一つとして位置付けられるものである。

近代中国語、特に新しい概念に対する新しい「語彙」の生成と発展、定着を見るとき、日本語との関わりが重要になってくる。この場合、いつ頃から日本語の影響、すなわち「日本語からの大量の逆輸入」が起こりうるかということを考える手だてとして、日本語書籍の翻訳・出版の過程を探ってきたわけであるが、それは『東西學書録』あたり、つまり1899年前後からということになるであろう。この時期はまた「商務印書館」の設立（1897年）とも重なってくる。商務印書館の最初の英華字典である『商務書館英華字典』の出版は1899年であるが、1902年の『商務書館華英音韻字典集成』はすでに日本の字典をも参照にしたことが明らかになっている。

また、商務印書館成立後、上海を中心としながら杭州、武昌などに日本語書籍の翻訳・出版にあたる機構が競うように出現する。（熊1994によれば1896年から1911年の間に少なくとも95を数えている）

『譯書經眼録』（顧燮光編1904）の次のような記述をまつまでもなく、このような大量の日本語関係書籍の流入が近代中国語に影響を与えたことは言うまでもないことである。

> 日本語の訳本について言えば、日清戦争後、留学生はみなその国に赴き、かつその国の文字は他の国に比べて容易であり、そのようなことから、日本語の訳本が書肆にみちあふれるようになった。また、わが国の文体もこれによって少し変化が見られるようになった。（『譯書經眼録』序例の諸（宗元）序　1904）[注5]

今後は、これらの時期における具体的な「語彙」についての検討を開始したいと考えている。

［注］

1.「官音」について、橋本1992では「官語（北京語）」としているが、ここでは「音」について述べており、しかも当時の「官音」とは、いわゆる「正音」で、それは北京官話のそれではなくて、むしろ「南京官話」のそれ、つまり「南京官音」であろう。たとえば、「鉀」で「K」を表わすのは北方ではなくて南方語である。

2.『讀西學書法』では、たとえばAllen（林樂知）によって訳された『文學興國策』について、「近印之文學興國策爲日本興學取法之書、然多閒文矣」と言うように、Allenの意図とは異なる評価を下している記述なども見られ、なかなか興味深いものがある。

3. 原文は以下の通り。

至遊學之國、西洋不如東洋、一路近省費、可多遣、一去華近、易考察、一東文近於中文、易通曉、一西書甚繁、凡西學不切要者、東人已刪節而酌改之、中東情勢風俗相近、易仿行、事半功倍、無過於此。

4. 原文は以下の通り。

日本與我爲同文之國、自昔行用漢文・・・・・・

計日文之易成、約有數端、音少、一也、音皆中之所有、無荊棘扞格之音、二也、文法疏闊、三也、名物象事、多與中士相同、四也、漢文居十六七、五也、故黃君公度、謂可不學而能、苟能強記、半歲無不盡通者、以此視西文、抑又事半功倍也。

5. 原文は以下の通り。

若日本文譯本、則以光緒甲午我國與日本構釁、明年和議成、留學者咸趨其國、且其國文字逐譯較他國文字爲便、於是日本文之譯本、遂充斥於市肆、推行於學校、幾使一時之學術、寖成風尚、而我國文體、亦遂因之稍稍變矣。

[参考文献]

傅蘭雅1880　「江南製造總極繙譯西書事略」『格致彙編』

鄒振環1886　「江南製造局翻譯館與近代科技的引進」『出版史料』第6期

吉野作造1909　「清國在勤の日本人教師」『國家學會雜誌』第23巻第5號

さねとうけいしゅう1960　『中国人日本留学史』くろしお出版

小柳司氣太1982　「藤田豊八博士略傳」『東方學』第63輯（『東西交渉史の研究』南海篇より移録）

須川照一1983　「上海時代の藤田剣峯・王國維雑記」『東方學』第66輯

王福康、徐小蛮1987　「清末的科學雜誌」『出版史料』第3期

鄒振環1989　「京師同文館及其譯書簡述」『出版史料』第1期

熊月之1989　「江南製造局翻譯館史略」『出版史料』第1期

葉再生1990　「現代印刷出版技術的傳入與早期的基督教出版社」『出版史料』第1期

張仲礼1990　『近代上海城市研究』上海人民出版社

橋本敬造1990　「中国の近代化と科学の知識」『関西大学教職過程研究センター年報』第4号

橋本敬造1992　「ジョン＝フライヤー『江南製造局翻訳事業記』訳注」『関西大学社会学部紀要』第23巻第2号

内田慶市1995　「商務印書館「漢英字典」の系譜」『関西大学文学論集文学部創設70周年記念特輯号』

『上海縣續志』1918

「上海通志館期刊」第1巻第2期1933（沈雲龍主編『近代中國史料叢刊續輯』第39輯　文海出版社）

梁啓超1896　『西學書目表』

梁啓超1896　『讀西學書法』

徐維則、顧燮光1902　『增版東西學書録』

翻譯館編1909　『江南製造局譯書提要』

『上海研究資料』1936　中華書局

中國史學會主編1953　『中國近代史資料叢刊　戊戌變法Ⅱ』神州國光出版
張静廬輯註1953　『中国近代出版史料初編』上雑出版社
張静廬輯註1954　『中国近代出版史料二編』聯出版社
『中国近代学制史料』第１輯　1983　華東師範大學
増田渉1967　『中国文学史研究』岩波書店
阿部洋1990　『中国の近代教育と明治日本』福村出版
汪向栄1991　『清国お雇い日本人』（竹内実監訳）朝日新聞社
熊月之1994　『西學東漸與晩清社会』上海人民出版社